ハイマート
Heimat

ぐんま日独協会 会報

２０１４年 12 月 25 日

４５号

発行者　　鈴木 克彬
発行所　　ぐんま日独協会
〒371-0105
群馬県前橋市富士見町石井 2445-219
電話　：027-288-4297
E-mail：info@jdg-gunma.jp

ホームページ　：　http://www.jdg-gunma.jp/
ホームページ右下『ハイマート』から本誌をカラーでご覧いただけます。

＊＊＊【ハンス・カール・フォン・ヴェアテルンドイツ大使とともに】＊＊＊

１．ハイマート 45 号に寄せて（会長のことば）　.....　２
２．ドイツ大使公邸における「秋祭り」に参加して　.....　３～４
３．ハイドンの《皇帝讃歌》とドイツ国歌について　.....　５～７
４．欧州旅行記　.....　８～１１
５．デザイナー修行奮闘記（連載－５）　.....　１２～１３
６．写真紹介「夏のお楽しみ会」・「クリスマスの集い」.....　１４～１５
編集後記　.....　１６

１．　ハイマート 45 号に寄せて　－　会長　鈴木克彬

『お互いの国の生活習慣や文化』長所を認識
・・・日独相互交流を通して学んだこと・・・

私はここ３年程、地元群馬テレビのコメンテーターとして、毎月１回（第１火曜日 18 時）出演しています。テレビ局からは、ぐんま日独協会の会長として、“日本とドイツの生活習慣や文化の違いを写真等を使い、広く県民の方々に楽しく紹介して欲しい”ということで行っているものです。

実際に３５回程、その都度テーマを決め、コメントしていますが、その内のいくつかを紹介したいと思います。

１　挨拶時（握手、名刺交換、乾杯等）の時、日本人は、礼義として、つい頭を下げてしまいますが、ドイツ人は、頭は下げず、相手の目を見て挨拶をし　ます。

２　スーパーマーケット等の売り場面積で、日本は魚売り場を広くとっていますが、ドイツでは、魚売り場は殆んどなく、逆にチーズ売り場を広くとっています。勿論、肉、ハム、ソーセージ等も広い面積です。

３　ドイツでは、和食文化に人気があり、寿司店は、ベルリンやフランクフルトでは２００～３００店程と言われています。（但し日本人経営は１～２割程）

４　鉄道の改札口。日本は機械が並び、自動チェックしていますが、ドイツは改札口に日付けの刻印機だけで、切符をチェックする機械はなく、また人もいません。全くのフリーパスです。
　・・・自動券売機での乗車券販売と車内検札で不正防止を図っています・・・

５　環境問題、ごみの減量化を目的として、ドイツでは２５年程前からペットボトル等のデポジット制（預かり金制度）を実行していますが、日本では、その制度はなかなか定着されていません。

全体的に：

ドイツ人は一般的に『こだわり屋』で、合理性と経済的インセンティブを加味した法律を州ごとに広範囲につくり、罰金制度を徹底して、物事を進めます。それに対し、日本の取り決めはファジーで、曖昧な点が多くあります。しかしサービス精神、おもてなしの心は日本の方が断然上で、ドイツでは時々、規則どおり、その冷たさを感じることがあります。ただ、『約束を守る』『信義を重んじる』という点では、両国は世界的に見て、最大の高得点国ではないか、と私は思っています。

要望すること：

言語の勉強も多いに大切ですが、自国、日本の文化も良く勉強して、訪独してください。ドイツ人は、日本の諸々の点を日本人から学びたがっています。

２．　ドイツ大使公邸における「秋祭り」に参加して　（髙野　誠　記）

都内のもみじも見ごろを迎え，晴天にも恵まれた平成２６年１１月２４日午後３時から，東京都港区所在のドイツ大使公邸において，ハンス・カール・フォン・ヴェアテルン新ドイツ大使主催の「秋祭り」が開催されました。ぐんま日独協会からは，瓜生郷子さん，私，妻の広美の３名が参加させていただきましたので，その様子などについて，ご報告いたします。

定刻よりも，かなり早めに大使公邸の正門前に到着してしまいましたが，既に「公益財団法人日独協会」の金谷常務理事がいらっしゃっていたので，難なく通過することができました。リフォームされたばかりという，白亜の公邸前には，青空の下，ＥＵ（ヨーロッパ連合）旗とともにドイツ国旗が翻っておりました。公邸に入るとウエルカムドリンクのサービスがあり，グラスを片手に，前庭を望むテラスにおいて，すっかり紅葉色に染まった木々を眺めながら，全国各地からやって来た参加者どうし，しばし歓談のときを過ごしました。

秋祭りは，大使のドイツ語によるご挨拶から始まりました。漏れ伺ったところによれば，大使は日本国に赴任されるのは初めてとのことですが，ドイツ外務省において，「ドイツにおける日本年」（２００５年）に関する諸行事の企画・準備等に携わったご経験があるとのことです。また，日本国に大使として着任後は，日本語の勉強も始められたそうです。

大使からは,「独日交流に力を尽くされている若い日本のみなさんと一堂に会することができてうれしく思います。日本の津々浦々，４７都道府県を見て回り，できる限り多くのことを吸収したい。」という趣旨のご挨拶がありました。
その後，参加者側から大使ご夫妻に対し，花束贈呈が行われましたが，大使は日本語で「きれいですね。」などと笑顔で応じられていました。

ビュッフェ立食形式でドイツ料理やワイン，ビール，スイーツ等が振る舞われ，参加者一同，ドイツの味に舌鼓を打ちながら楽しく歓談することができました。

ところで,この秋祭りにおいて,私たちは,ある重要ミッションを与えられていたのですが,全国各地から集まった多数の参加者の中で,そのタイミングをつかみかねていました。そのような状況の中，日独協会の金谷常務理事から叱咤激励を受けた私たちは,意を決して大使のもとに歩み寄りました。そこで,瓜生さんが,その明瞭なドイツ語をもって大使に「私たちは,群馬から来ました。群馬は,

【ヴェアテルンドイツ大使とともに】

東京から近いところにあります。是非一度，群馬へお越しください。」とお伝えしました。大使は，群馬が東京と地理的に近いことを既にご存じであり，「(群馬が東京から近いことは) 知っています。(群馬には) 伺いたいです。」とおっしゃっていました。これに対し，瓜生さんが重ねて「心からお待ちしています。」と申し上げました。

大使は，非常にご多忙である上，諸般の事情もあるため全く分かりませんが，群馬訪問が実現することを祈ります。私も大使に随行していたオステン通訳・翻訳部長に「ぐんま日独協会では，来年７月，ドイツフェスティバル in ぐんまを開催すべく準備を進めています。大使にも是非ご出席願いたいと思っています。」とお伝えしました。

【オステン通訳・翻訳部長とともに】

オステン部長とぐんま日独協会は，群馬県庁において大使館の通訳・翻訳業務に関して講演していただいたご縁があります。そこで，講演での「当事者の間に立つ通訳は，当事者にその存在を意識されないことが求められる。つまり，通訳は透明な存在でなければならない。会話がスムーズに進むためのベストな環境を整えることが最大の使命である。」とのお話は，とても心に残るものであった旨も申し上げました。

【私たちがいつもお世話になっている日独協会のタベアさんとも懇談できました】

今日，我が国は，世界の大多数の国々と友好関係を築くに至っていますが，その中で日本とドイツのとりわけ強い絆や相互交流の広がりを感じつつ，パーティーの余韻覚めやらぬ大使公邸を後にしました。平成２７年３月初めには，メルケル独首相の日本訪問も予定されています。日独関係の一層の進展を願って止みません。

おわりに，このような貴重な機会を与えていただいた鈴木会長，對馬副会長，近藤事務局長をはじめ，みなさまのご配慮，ご尽力に対しまして，紙面をお借りして心から感謝申し上げます。

３．ハイドンの《皇帝讃歌》とドイツ国歌について　（澤田　まゆみ　記）

2014 年夏の Sommertreffen で、クララ・シューマン（1819-1896）作曲の《ウィーンの想い出》Op.9（1838）というピアノ曲を演奏させていただいた。この曲は当時のオーストリア国歌、ハイドンの《皇帝讃歌》のメロディー（現在のドイツ国歌）を用いた即興曲だ。

国歌は、日本でも明治時代に初めて国歌制定の機運が高まったことからもわかるように、国により様々な事情や歴史と関係している。ドイツ国歌の制定や変遷についても非常に複雑であるので、いくつかのポイントをもって紹介をしてみたい。詳細については以下に詳しく出ているのでご覧いただきたい。

出典：ドイツ連邦共和国大使館・総領事館ホームページ　内
—　ドイツ連邦共和国概略　—ドイツ連邦共和国国歌
ドイツ連邦広報情報庁　www.bundesregierung.de
ドイツ政治教育センター www.bpb.de
世界の国歌・行進曲　www.world-anthem.com/

Ⅰ　もともとはオーストリア国歌

現在のドイツ国歌は、もともとフランツ・ヨーゼフ・ハイドン Franz Joseph Haydn (1732-1809) がオーストリア政府に働きかけ、1797 年にクロアチア民謡を基に《神よ、皇帝フランツを守り給え　Gott erhalte Franz den Kaiser》を作曲し、国歌として神聖ローマ皇帝フランツ 2 世の誕生日に献呈したものである。

18 世紀後半、フランスではフランス革命を機に《ラ・マルセイエーズ》（現フランス国歌）が、イギリスでは《God Save the Queen(King)》（現イギリス国歌）が国内で定着しており、オーストリアでも愛国的な賛歌を求められていたためだという。このハイドン作曲の歌が 1804 年に成立したオーストリア帝国で正式な国歌となり、オーストリア＝ハンガリー帝国（1867-1918）でも国歌として継承された。

【Franz Joseph Haydn
フランツ・ヨーゼフ・ハイドン（1732-1809）】

Ⅱ　プロイセン王国～ドイツ帝国（1871-1918）時代

【Hoffmann von Fallersleben
ホフマン・フォン・ファラースレーベン（1798-1874）】

ドイツ（当時まだ存在しないが）では、プロイセン王国においてイギリス国歌《God Save the Queen》にドイツ語の歌詞をつけた《皇帝陛下万歳 Heil dir im Siegerkranz》が非公式国歌として、また、ドイツ帝国時代にもこれが事実上の国歌として歌われていたが、替え歌であり独自性を欠き、人気もあまりなかったという。

1841 年、ホフマン・フォン・ファラースレーベン Hoffmann von Fallersleben（1798-1874）は、ドイツ民族の統一を願い、当時オーストリア＝ハンガリー帝国で歌われていた前述のハイドン作曲《神よ、皇帝フランツを守り給え》のメロディーに作詞をし、賛歌《ドイツの歌 Deutschlandlied》が誕生する。

Ⅲ　ヴァイマル共和国にて《ドイツの歌》が正式国歌に

1919 年に成立したヴァイマル共和国（ワイマール共和国・ドイツ共和国）にて、賛歌《ドイツの歌》が正式に国歌として採用された。

ナチス・ドイツ時代（1933－1945）には 1 番のみを国歌としていた。覇権主義を正当化する内容であること、また、戦後ドイツの領土ではなくなった地名が含まれていることから、第二次世界大戦後は批判を受け、新国歌制定の試みもみられたが、その後、3 番の歌詞が東西ドイツの統一を願うものとしてふさわしいということになり、1952 年に 3 番のみを歌詞として再び正式に西ドイツの国歌となった。東西統一後、1991 年にも現在のドイツ連邦共和国の国歌として受け継がれている。

1番（ナチス・ドイツ時代に使用）	訳：ウィキペディア『ドイツの歌』より
Deutschland, Deutschland über alles, Über alles in der Welt, Wenn es stets zu Schutz und Trutze Brüderlich zusammenhält. Von der Maas bis an die Memel, Von der Etsch bis an den Belt, Deutschland, Deutschland über alles, Über alles in der Welt!	ドイツよ、ドイツよ、すべてのものの上にあれ この世のすべてのものの上にあれ 護るにあたりて 兄弟のような団結があるならば マース川からメーメル川まで エチュ川からベルト海峡まで ドイツよ、ドイツよ、すべてのものの上にあれ この世のすべてのものの上にあれ
3番（現在国歌として使用）	訳：ドイツ連邦共和国大使館・総領事館 HP より
Einigkeit und Recht und Freiheit Für das deutsche Vaterland! Danach lasst uns alle streben Brüderlich mit Herz und Hand! Einigkeit und Recht und Freiheit Sind des Glückes Unterpfand Blüh' im Glanze dieses Glückes, Blühe, deutsches Vaterland!	統一と正義と自由を 祖国ドイツに！ 友よ求めて進まん 心合わせて手を結び！ 統一と正義と自由は 幸せの証 この幸せの輝きの中 栄えあれ、祖国ドイツ！

現在のドイツ国歌であるハイドン作曲のメロディーは、オーストリア帝国で正式に国歌に採用される数年前には、既にイギリスで讃美歌《Glorious things of thee are spoken（Austria)》として歌われていたそうだ。日本でも、日本基督教団讃美歌 194 番「さかえにみちたる（栄えに満ちたる)」や、聖歌 199 番「輝く姿は」としても歌われているという。また、テキストを書いた詩人ホフマン・フォン・ファラースレーベンは、日本でもよく知られる《Summ, Summ, Summ ぶんぶんぶん》や、カッコウの鳴き声を題材とした《Kuckuck, Kuckuck, ruft's aus dem Wald かっこう》など、童謡や子供向けの歌も多く作詞した。

ナチス・ドイツ時代にも使用された暗い歴史もあるが、約 200 年以上も前からハイドンのメロディーがドイツ以外でも歌われていることや、約 170 年前にファラースレーベンがドイツ民族の統一を願って作詞をしたことに思いを馳せながら、現在のドイツ国歌を私たちも今後の日独親交において歌っていけたらと思う。

４．欧州旅行記（藤坂　浩史　記）

●はじめに

私が初めてドイツを訪れたのは２０１１年のことであった。ハイデルベルクで勉強していた友人を訪ね、そこで約３週間のドイツ生活を体験した。それまでのドイツのイメージはBMWやベンツなどの高級車を生産する工業国で真面目な職人の国という固いイメージがあり、友人から誘われなければドイツに行くことは無かったと思う。ドイツに滞在して見えてきたことは街にも人にも日本にはない豊かさがあること。興味を持ってから毎年１，２回ドイツに足を運び、ドイツと周辺国を歩き回った。今回は２０１４年８月に訪れたドイツおよび周辺国の旅行についてレポートする。

●ルート

今回の旅行はミュンヘン国際空港を利用し、次のルートを回った。

ミュンヘン→プラハ→カトヴィツェ→ブダペスト→ウィーン→インスブルック→ミュンヘン

丸（実線）は宿泊した都市、丸（点線）は訪問した都市を表す。

●準備

航空チケットはＳｋｙｓｃｈａｎｎｅｒやｍｏｍｏｎｄｏを駆使して安いチケットを調査する。今回はＳ７航空　成田－ミュンヘン（モスクワ経由）１３６００円（＋燃油代　これが高いのだが…）という値段の正規割引航空券を見つけ、とりあえず購入した。

宿泊先はＢｏｏｋｉｎｇ．ｃｏｍでキャンセル料無料の宿をルートに合わせ訪問日前後を押えておく。

鉄道チケットはドイツ滞在日数が少ないため、ジャーマンレイルパスを使わずにドイツ鉄道のＨＰで早期割引のミュンヘン→プラハのチケットを購入した。

オーストリア内のルートが確定しておらず、都度切符を買うと高額になる恐れがあるため保険としてヨーロピアンイーストパスを購入した。（このパスのオーストリア以外の利用は高速鉄道がなく移動距離も短く物価が安いため元が取れない）各都市間やエリア間にお得な鉄道チケットがあるので事前に購入方法を調査しておく（バイエルンチケットなど）

●日程

１日目　成田→モスクワ→ミュンヘン（ミュンヘン泊）

乗継で初めてロシア（モスクワ　ドモジェドヴォ国際空港）に立ち寄る。乗継の待ち時間は空港内を散歩する。社会主義時代のイメージとは異なる免税店が建ち並ぶ近代的な空港であった。モスクワからミュンヘン国際空港へ向かい、ミュンヘン中央駅近くのホテルへ。

２日目　ミュンヘン→ニュルンベルク→プラハ（プラハ泊）

ミュンヘンからプラハへ向かう。ミュンヘンからプラハ行きのバスも出ているが以前に利用したときに渋滞に巻き込まれた苦い経験があり、今回はＩＣＥでニュルンベルクに出て、そこからバスに乗換えプラハに向かう。ニュルンベルクからプラハは高速道路で続いているため、渋滞に巻き込まれることもなく予定より早くプラハに到着した。

３日目　プラハ市内観光、プルゼニ日帰り（プラハ泊）

プラハの日中は観光客でごった返し、観光地に行ってもじっくりと見ることができない。もしプラハに宿泊するのであれば、朝早く市内を歩き観光客がいないプラハを観光することを薦める。

午後はバスでプルゼニに向かう。プルゼニはビールのピルスナービールが生まれた街。ピルスナーウルケル醸造所があるのでぜひ見学した。見学の最後には樽から注がれた特別なビールを試飲できる。

４日目　プラハ→カトヴィツェ（カトヴィツェ泊）

プラハからポーランドのカトヴィツェに移動する。プラハーオストラヴァまでＳＣペンドリーノに乗り、そこからＥｕｒｏＣｉｔｙに乗換えカトヴィツェへ向かう。ポーランドに入ると運営する鉄道会社が変わるようで菓子とドリンクが配布された。カトヴィツェに到着しホテルにチェックインしてから街を散策した。物価も安く治安も良さそうでまた滞在してみたい街であった。

５日目　アウシュヴィッツ日帰り（カトヴィツェ泊）

カトヴィツェからアウシュヴィッツがあるオシフィエンチムへ鉄道で移動。カトヴィツェーオシフィエンチム間は列車の本数が少ないので注意。アウシュヴィッツの展示は非常によく考えられており、棟がテーマごとに分かれている。最後に見た展示が衝撃的で外に出て青空を見た時にタイミング良く鐘の音（時報？）が鳴り響き、平和の素晴らしさに涙が流れた。是非、機会があればアウシュヴィッツに立寄ることをお薦めする。

６日目　カトヴィツェ→ブダペスト（ブダペスト泊）

カトヴィツェからブダペストまでＥｕｒｏＣｉｔｙで移動する。７時間の長旅だが車窓はいろいろな景色の変化があり飽きない。ブダペスト東駅に到着すると駅内に待ち構えていたタクシー運転手や両替商などが観光客に対して声をかけてくるようなアジアを感じさせる場所であった。

７日目　ブダペスト市内観光（ブダペスト泊）

ブダペスト市内の物価は場所により様々で観光客が集まる広場の屋台のはかり売りはかなり高かったようだ。食費を節約したい場合は食べる場所を事前に調査しておくと良いかも。ブダペスト西駅はエッフェルが手掛けた建物でその中にマクドナルドがある。世界一美しいマクドナルド（写真）といわれている。

８日目　ブダペスト→リンツ→ウィーン（ウィーン泊）

ブダペストからｒａｉｌｊｅｔに乗りリンツへ。途中のウィーン市内の駅を通過したとき、イメージにあるウィーンとは異なる街並みで驚く。リンツ市内を観光しながらオーストリアで使用するＳＩＭを購入。リンツからＩＣＥに乗りウィーンに戻りホテルにチェックイン。

９日目　ウィーン市内観光（ウィーン泊）

ウィーン市内はレンタサイクル（写真）が整備されているので是非利用したい。利用方法は予めインターネットから登録をすることをお薦めしたい。登録にはクレジットカードが必要だが自転車を１時間以内に返却すれば料金は掛からない。スマホアプリもインストールすれば地図に返却場所や空き状況が確認できるので便利。自転車に乗っている時、ウィーンの狭い路地で前から馬車が来ると衝突しないか不安であった。

１０日目　ウィーン市内観光、ブラティスラヴァ日帰り（ウィーン泊）

ブラティスラヴァの通貨はユーロだが物価が非常に安い、スロヴァキアの首都とは思えないくらい落ち着いた街であり、街の南には共産主義時代に立てられたと思われる集合住宅が建ち並ぶ。非常に居心地のよさそうな街。
ブラティスラヴァからウィーンに戻り中央墓地へ向かう。この墓地には有名な音楽家が眠る区画があり観光客で賑わっていた。

１１日目　ウィーン市内観光、グラーツ日帰り（ウィーン泊）

午前はウィーン医科大学にある病理解剖学博物館へ。展示物がリアルなので見る人を選ぶかもしれない。午後はウィーン西駅からｒａｉｌｊｅｔに乗りグラーツへ。山の中をゆっくりと２時間３０分でグラーツ中央駅に到着。グラーツの高台から見る街は非常に美しかった。

１２日目　ウィーン→インスブルック（インスブルック泊）

ウィーン西駅からｒａｉｌｊｅｔに乗りインスブルックへ向かう。この路線はアルプスの中を通るため壮大な景色（写真）を満喫することができる。インスブルックは去年訪れた際に、街を囲むアルプスに圧倒され再び訪れたいと思っていた。街を歩いていると周りを囲むアルプスからエネルギーが貰える感じがした。

１３日目　インスブルック→ミュンヘン（ミュンヘン泊）

インスブルックからガルミッシュ＝パルテンキルヒェン経由でミュンヘンに向かう。インスブルック中央駅でオーストリア国内のチケットとバイエルンチケットの２枚を購入。このルートも列車から見る景色は美しく飽きることはない。ミュンヘンに到着し時間が余っていたので近郊にあるダッハウ強制収容所に行った。アウシュヴィッツほどのインパクトはなかったが、人体実験の展示の前にはたくさんの人がいた。

１４日目　ミュンヘン→モスクワ（空港泊）

ミュンヘンからインゴルシュタットにあるアウディフォーラムを見学。アウディの古い車は暖かみのあるデザインで可愛い車（写真）が並んでいた。

インゴルシュタットからミュンヘンに戻り、市内を散歩後、ミュンヘン国際空港へ移動。空港内でドイツ人向けの日本旅行の本を購入してみた。本には日本文化の特徴である、アニメ、草食系男子、神道、六曜、元号、天皇、盆栽、うまみなど日本人は当たり前すぎて気づかないことが詳しく説明されていた。そしてミュンヘンからモスクワへ

１５，１６日目　モスクワ→成田

モスクワ　ドモジェドヴォ国際空港では１５時間の滞在となった。空港内での飲食は非常に高く水が１本６００円。現地通貨があれば販売機で格安に飲み物を購入することも出来たのだが。余りの価格に腹立たしく１５時間飲食せずに過した。成田行きの飛行機内でのドリンクサービスで早速ビールを注文、この日本製のビールは忘れられない味となった。

今回搭乗した成田－モスクワ間の飛行機は往復とも共同運航便である日本航空のボーイング７８７であった。搭載されている電子カーテンを初体験したが、太陽が出ていても透過率を変えれば景色を見ることが可能でまるで海の底から見ているような美しい風景（写真）だった。

●おわりに

今回の旅行は再度訪れたかったプラハおよびインスブルックと一度は行ってみたかったアウシュヴィッツ、またＮＨＫまいにちドイツ語の「レアとラウラと楽しむドイツ語」と「Österreich - Impressionen オーストリアの魅力について話そう」の２つの番組に出てきた地域を回ってみた。レアとラウラに登場したショプロン（ハンガリーとオーストリアの国境）で開催された汎ヨーロッパ・ピクニック（ベルリンの壁崩壊の引き金となった）で開けた鉄のカーテンの穴を通過しに行きたかったが、調査ミスで失敗に終わった。今思えば、ウィーンで自転車をレンタルし、ショプロンまで電車で運び、サイクリングすれば実現できたのかなと。

またドイツに行くことがあれば少し足を延ばし、ショプロンのこの場所を訪れたい。－以上－

５．デザイナー修行奮闘記　－　連載　5（井上 晃良 記）

ブレーメン到着

成田空港を飛び立った飛行機は、北回りアンカレッジ経由でアムステルダムのスキポール空港へ到着。冷戦中だった当時の欧州便は、ソビエト上空を飛行出来ないため、ほとんどがアラスカのアンカレッジ経由である。スキポール空港からの乗り継ぎ便は、ターボプロップ機の小さなマシンで、降機するのはタラップであった。朝だったこともあって、機外へ出たとたん肌寒かったのを憶えている。外気温は８月というのに摂氏 15 度である。半袖姿の私は、最初にその寒さの洗礼を受けた。空港からタクシーで駅へ向かい、歩いて語学学校の受付へ行く。授業が開始されるまで約１週間ほどあり、その間はホテル住まいとなるので予約しているホテルの場所を聞いて、当面の宿へと行く事にした。

ブレーメンは、西ドイツではハンブルクと並んで小さな州の１つで州都でもある。ドイツの中で、中世には自由な交易を行う３つのハンザ同盟の一都市として栄えたことでも有名である。今でもブレーメンは「Hansastadt Bremen」と呼ばれていて、これはブレーメン市民が今なお誇りに思っている一つである。自動車ナンバーも「HB」となっている。余談であるが、残りの２つのハンザ都市であるハンブルクは「HH」であり、リューベックは「HL」である。

語学学校からほど近い小さなホテルは、瀟洒な佇まいである。しかし、私にあてがわれたシングルルームは狭い。なので、ここではとてもじっとしていられない。長旅に疲れた身体に鞭打ってとにかく外出をしてみる。これから最低でも数ヶ月は住むことになるブレーメンという街を知る事が大切であると思ったからである。

やはり観光としてではないという思いは、物見遊山な気持ちになれない。そこで、まず行ったところはブレーメン中央駅である。ここにくれば、色々な情報が得られることもあるが、それ以上に折角到着した西ドイツの列車を見ないわけにはいかないからだ。

ブレーメン中央駅の駅舎は、石造りのとても立派な建物である。ホームに立つと大きなドームが目の上に広がる重厚な駅である。それは、南ドイツのニュルンベルク中央駅にも負けない威容を誇る。そして駅前にはタクシーやバス乗り場と共に路面電車の電停が整備されており、沢山の路面電車が行き来している光景が目前にあった。私にとって路面電車は、幼少時に自宅の近くを走っていた東京都電以来かも知れない。その都電もすぐ廃止となってバスに置き換わってしまったので、ほとんど路面電車の記憶がない。要は、都市交通としての路面電車の役割そのものの理解が当時の私の頭にはなかったのである。

次に向かったのは、ブレーメンの旧市街である。そこは中央駅から歩いて 10 分程度であろうか。ブレーメンは中心市街を囲むように防衛施設の名残である外堀が残っていて、現在は公園として市民の散策ができるようになっている。旧市街の中心は、外堀を抜けたところにある。路面電車も中央駅から中心市街地へと線路が延びている。旧市街の中心にあるのが有名なローランド像、そして市庁舎、ドーム（教会）である。この市庁舎前広場がまさにブレーメンの中心であり、トランジットモールになっているため、バスと路面電車以外は通行禁止である。マルクト広場から路面電車線路と一緒に伸びている通りがショッピングを楽しめるモールとなっていて、こちらもトランジットモールである。よって公共交通車両以外の自動車の通行がなく、安全に散策とショッピングが楽しめる構造となっている。私の視界の全てが歴史的な建造物で満ちている旧市街の重厚で美しい街並と、バスと路面電車だけが通行を許されている広い道路には、完全に道路と歩道を分離しているバリアがそこになはく、歩行者は通り全体を歩道のように歩いているのである。これは、歩行者が最優先であるドイツと自動車が優先されがちな日本との大きな違いである。既に地方の中心市街地の空洞化が叫ばれて久しい日本では、駐車場の確保を最優先し、未だにその問題に悩んでいる自治体も少なくないが、公共交通機関のあるトランジットモールと歩行者最優先のドイツの中心市街地の考え方が理解されていないのは、残念の極みと言えよう。

ブレーメンの中心市街地の一角に、ベトヒャー通りとシュノアー地区という２つの魅力溢れる一角がある。ベトヒャー通りもシュノアー地区も中世には職人街であったと聞く。この２つの場所はさほど遠くなく徒歩で数分の距離であり、現在はその美しい家並みが観光スポットとなっている。特に、このシュノアー地区は、その後約１年間ブレーメンに滞在した私にとって、孤独に苛まされた様々な苦悩を癒してくれる心のオアシスとなった思い出深い場所となったのである。
（続く）

（本記事はイカロス出版株式会社発行『鉄道デザイン EX 01』に連載されたものを転載したものです。同社のご好意により転載の許可をいただいています。）

６．写真紹介

☆夏のお楽しみ会（２０１４年８月３日）

【会長挨拶】

【会場風景－階段状で左下が舞台】

【豪華な手作りお菓子】

【對馬副会長の手品】

【インタビュー形式の自己紹介】

☆クリスマスの集い（２０１４年１２月７日）

【会場風景－「夢スタジオ」
のメインスタジオ】

【会長挨拶】

【来賓ご挨拶の福田国際戦略課次長】

【自作俳句朗読の深田会員と
ドイツ語訳朗読のトニー】

【全員参加のクイズ大会ー
プロジェクター使用で会場は
暗いが、熱気に包まれた】

【コール詩音のみなさん】

【全員での「モミの木」合唱前のトニーによるドイツ語歌詞指導】

編集後記

２０１５年開催予定の「第６回ドイツフェスティバル in ぐんま」のメインテーマである「家庭ごみー日独の比較（仮称)」の勉強会を月１回のペースで進めています。多くの会員の参加を期待しています。次回勉強会は１月１７日（土）１０時～12 時、場所は前橋元気２１の３階会議室です。

ドイツでフルートを勉強しているアマチュアの若いドイツ人女性４人（１５歳～１８歳）が日本で各地の日独協会の応援を得ながら記念演奏会を２０１５年８月に行うことを計画しています。群馬県では当協会の全面的な支援の下に、演奏会を８月２５日（火）に前橋プラザ元気２１にて行う予定です。昼間の演奏会として夏休み中の学生・生徒さんにも大勢来場していただき、交流ができるように配慮したいと思います。詳細が決まりましたら会員の皆さまへ通知をしますので、是非ご支援をおねがいします。

２０１４年８月３日（日）および１２月７日（日）にそれぞれ前橋「夢スタジオ」にて「夏のお楽しみ会」「クリスマスの集い」を行いました。これらの日は毎月開催のドイツサロンも兼ねて、音楽・各種かくし芸の披露など楽しいひと時を過ごしました。

今回も多くの会員の方々がヨーロッパ・ドイツで活躍をされ、また旅行を楽しまれています。ドイツ以外のヨーロッパの様子も交えながらヨーロッパの中でも国により文化の違い、習慣の違いがあることがよくわかり興味深いです。今回、ドイツ国歌のお話がありました。凄い歴史を持ったものだということがわかります。ところで、日本の国歌「君が代」の歴史にはドイツ人も登場することをご存知ですか？歌詞は『古今和歌集』の短歌の一つであることは知られていますが、曲がつけられたのは明治 13 年で、紆余曲折はありますがドイツ人音楽家の海軍軍楽教師フランツ・エッケルトが西洋風和声を付けたものなのです。と、こんなところまで、空想が広がるのも楽しいです。

M.K.